

余録

歴史上の人物の名前の読み・表記について

宇根俊範

「日本史関係・歴史教育関係・現場の声、なんでもいいです。エッセイ風の軽いものでもかまいません」という原稿依頼の呼び掛けに甘えさせていただいて、長年教壇に立って「歴史」の講義（授業）をしながら折々に感じたことの一部を紹介させていただきたい。これも一つの「教育現場の声」として読んでいただければ幸いである。

高専での「歴史」の授業は比較的自由度が高いので、自らの研究対象であった日本古代社会の氏姓については結構時間を割いて講義しているが、氏姓の話だけでは学生の興味をひかないので氏姓に限らず「氏姓・苗字・名前の歴史」と題して講義している。その取っ掛かりとして歴史上の人物の名前に関する以下のような話をしている。

もう、かれこれ四〇数年も前のこと、私が学部の一学年のとき一般教養科目として、日本語とポルトガル語を比較研究されている先生（失礼ながらお名前は記憶していない）の講義を受けていたが、先生が突然「日本にキリスト教を伝えたのは誰？」と受講生に質問された。私は心の中で「ザビエル」と回答したが、その先生曰く「君たちはザビエルだと思っただろう」と言われるので、話の流れから「もしかしてザビエルではないの・・・？」と考えていたところ、先生は「あれはザビエル

ではなく『シャビエル』だ」と言われた。普段から冗談など言われない先生だったので、このときだけは受講生の多くが笑ったのを今でもよく覚えている。

それから一〇数年後、この話を偶然に思い出す機会があった。朝のNHKのニュースで山口市にあるザビエル記念聖堂が全焼したというニュースが流れた。画面では美しいステンドグラスの教会が無残な姿に焼け落ちる光景が流れていたが、よくよくアナウンスを聞くと「・・・ここは一六世紀にイエズス会のザビエルが・・・」「ザビエルの来日を記念して・・・」と語っているのである。山口には広島大学国史学研究室の卒業生が多数いるので、後輩に早速電話を入れた。

「今日は大変なことが起きたな」と話すと、彼は「そうなんですよ。しかも放火らしいですよ」の回答。しばらく話したのちに「ところでザビエルはザビエル？」と聞くと「山口ではみんな『サビエル』と濁らずに言いますよ」と言う。と同時に、あるとき「シャビエル」の講義をされていた先生を思い出した。

そもそもXavierの発音であるが、ポルトガル語らしくポルトガル語を母国語とするブラジルの方に綴りを見せて発音していただくと躊躇なく「シャビエル」と発音された。ちなみにサッカーに詳しい方はご存知と思うがスペイン代表に「シャビ」(≡Xavier)、「シャビ・アロンソ」(≡Xabier・Alonso)と二重名選手がいる。Xavier・Xabier・Alonsoは決して「ザビ」、「ザビ・アロンソ」とは呼ばれない。

長年、キリスト教伝来はザビエルと教えてきたが、今では私も「シャビエル」と教えている。本校の授業で使用している清水書院の教科書には「ザビエル」の表記とともに「シャヴィエルとも表記される」との記述があり、もしかしら数年後には「ザビエル」の表記は「シャヴィエル」にかわるかもしれない。

外国人の名前は、おそらく発音により近い表記をするようになったの

だろう。かつて「ガンジー」であったインド独立の父は近年、「ガンディー」と変わった。綴りは Gandhi である。一九八三年にアカデミー賞の作品賞などを獲得した映画「ガンジー」では、英国人が主人公に「ミスター・ガンダイ」と呼びかけ、ガンディーが「ガンディーです」と答えるシーンがあるが、綴りを見れば「ガンダイ」と呼んだのもある程度納得できる。「ガンディー」の例などは D: 音を「ジ」から発音により近い「デイ」で表記しようとする動きであろうが、その点でいくと、小さいころ読んでいたアラビアンナイトの Aladdin も「アラジン」ではなく「アラディン」にしたほうがよさそうである。

発音により近く表記する点から行けば、交響曲「運命」「田園」などでお馴染みの「楽聖」ベートーヴェンもドイツ語では「ベートホーフェン」、交響曲「新世界より」で著名なチェコの作曲家ドボルザークはチェコ語で「ドヴォルジャーク」である。

この件で、私にとつて最も受け入れがたかったのは、世界恐慌に際し、ニューディール政策を実施したアメリカ合衆国第三十二代大統領 Roosevelt である。私たち昭和の世代には「ルーズベルト大統領」であり、長年「ルーズベルト」であり続けたが、近年の教科書には「ローズヴェルト大統領」で登場する。発音により近い表記なのであるが、私には全く別人のように響いてくる。

翻って日本史に登場する人物においても似たような事例は多くある。近江の戦国大名「浅井長政」の「浅井」は最近では「あさい」ではなく「あざい」、出雲の戦国大名「尼子経久」の「尼子」も「あまこ」と濁って読み、豊臣秀吉の正室「ねね」は今では「おね」（あるいは「ねい）」である。赤穂事件の「吉良上野介義央」の「義央」は久しく「よしなか」と読まれていたが「よしひさ」と読むのが正解らしい。

天正の少年遣欧使節を計画したイエズス会のアレックスサンドロ・ヴァリニャーニについていくつかの教科書が「ヴァリニャーニ」とするのに対して

し、清水書院の教科書では「ヴァリニャーノ」とする。これについて調べてみると「アレックスサンドロ・ヴァリニャーノ（ヴァリニャーニ、Alessandro Valignano/ Valignani）」となっており、どちらでもよいようであるが、受験生は少なからず混乱するであろう。

人様の名前を読み間違えるのは大変失礼なことであるとされるが、近年、「極（＝マックス）」「亜蓮（＝アレン）」「闘女（＝キュア）」など、アニメに登場するキャラクターや外国人を思わせるような「キラキラネーム」なる名前が話題となっている。名前に正確な振り仮名をつけた資料を後世に残しておくかないと、名前を正確に読むことが益々困難となってくるであろう。

編集後記

『史人』第七号をお届けします。本号は坂本賞三先生卒寿記念・下向井龍彦先生退職記念特集号です。これまで、王朝国家論を武器に広島大学の日本古代史研究を牽引されてこられたお二人の先生がそれぞれ節目を迎えられました。とは言え、まだまだ旺盛な研究意欲をお持ちであることは、本号の表紙からもうかがえます。お二人はこれからも変わらずご活躍されることでしょう。

そして、後進の私たちには、先生方が築かれた研究を受け継ぎ、さらに次の世代へと伝えていく使命が託されています。教育・研究を取り巻く環境は厳しいですが、皆さま、前を向いて進んでいきましょう。

（渡邊）

史人

編集発行 広島県東広島市鏡山一丁目一一

広島大学大学院教育学研究科下向井研究室

（郵便番号 七三九一八二四）

TEL 082-424-7065

E-mail shimoken@hiroshima-u.ac.jp